

『増鏡』と擬古物語

—恋愛情事記事に關して—

小島 明子

『増鏡』の研究史上で、宮中秘事・恋愛情事を含む王朝情趣生活を重視する読みは昭和二十年以降に盛んになり、岩波古典文学大系の解説で、木藤才蔵氏は「作者は、源氏物語をはじめとする王朝の物語の面影を、鎌倉時代の貴族の生活に求め、王朝の伝統を確認しながら、歴史を書きつづつていった」とされる。この評価は、その後も、小山利彦氏、西沢正二氏、河北勝氏などによって今日まで継承されている。

ところが、伊藤敬氏は『増鏡考説——流布本考——』（新典社・平成四年刊）の第五章の四において、その読みのみでは十分として、以下の注目すべき主張をされた。

作者は、時代相の推移、その歴史的認識、歴史叙述、史観の表現としてこれらの物語を記述したのである。（中略）優艶に描くことでかえって露呈した、退廃・時代錯誤、その筆勢、作者の意図を読み落とすべきではない。

ここで伊藤氏の言う「時代相の推移」ということを考える時、辛島正雄氏「中世擬古物語研究への一視点——『浅茅が露』『増鏡』所見の類話のことなど——」は示唆的である。辛島氏は、『増鏡』第十三「秋のみ山」で、後醍醐天皇の後宮である大納言典侍を、堀川具親が盗み出した、という事件が、『あさぢが露』の中でも帝——大納言典侍——源中将の三者の間に見られることを提示さ

れた。しかし、『あさぢが露』は『風葉和歌集』以前に成立したことが明らかたため、『増鏡』記事に学んだのではなく、『偶然のもたらした相似』かとしておられる。だが、これは逆に『増鏡』の方が『あさぢが露』を参照している可能性はないのかという疑問が生じる。

そこで、『増鏡』中の恋・情事のエピソードを、擬古物語を中心に比較検討してみた。

まず第一に、兄と妹の間の恋・情事は、（ア）洞院侘子と同母兄公宗、（イ）前斎宮暉子と異母兄後深草院、（ウ）憺子内親王と異母兄龜山院の三件が『増鏡』にはある。この（ア）では、プラトニックな恋心が綴られるが、（イ）（ウ）になると異母兄妹の間に私通が行われ、特に（ウ）には姫宮の誕生さえある。

この兄妹の相姦のモチーフでは、擬古物語に『下燃物語』がある。中納言が、帝妃となった妹に思いを寄せ、密通によって姫君も誕生するが、中納言は下燃えの思いを抱きつつ死ぬ、という筋書きであるらしい。前半部を欠く残欠本のみでは確かな比較はしがないが、設定・表現の両面で、『下燃物語』と『増鏡』の間には共通項が多い。無論、歴史物語である『増鏡』が、フィクションである擬古物語をむやみに引用することはあり得ないが、ある程度の骨子が共通する事件の描写に際し、表現・設定の流用が行われることは十分に考えられることであろう。『あさぢが露』『増鏡』の關係と同様、これも偶然の一致と考えるべきではないと思われる。また特に（イ）では、二人の逢瀬において、女君の様子・男君の心情の二点で、「……などはし給はず」「……ではなけれど」と従来の伝統的表現を否定した描写がなされる。これは、物語の類型表現を踏まえているからこそ可能であり、平安後期物語・擬古

物語と『増鏡』の浅からぬ関係が窺われるのである。

第二に皇女たちの私通に目を移すと、①月花門院綜子、②前斎宮愍子内親王、③憺子内親王、④後嵯峨院姫宮の四例がある。この四名はいずれも後嵯峨院の皇女である。『増鏡』の記述によれば、父院の愛を受け、社会的信望もあり、加えて美貌をも備えた皇女が、密通を行う、という類型に該当する。しかも、①綜子・②愍子が密通の相手が複数でさえある。また、④の姫宮の場合は、もともと後堀川院と神仙門院との私通から誕生した人物が、長じてまた私通を行う。それらは擬古物語が好んでモチーフとしている所である。

三田村雅子氏は、鎌倉時代における、皇女の犯しに関して「帝の妃を犯すことと、同等、あるいはそれ以上の、タブー破りと考えられていた」とされる。加えて、①綜子は、史実上「一品宮」で、それを手に入れた者は「王権を侵犯し、奪い取る観念」があるとさへ氏は言う。

①綜子の事件は、龜山天皇の御代（後嵯峨院政下）で起こり、②愍子・③憺子・④姫宮は、後宇多天皇の御代（龜山院の院政下）でのことである。つまり、大覚寺統（私には「公武対立派」と、別稿「国語国文」平成五年九月号所収「増鏡」の先例の意味——「明暗循環」説との関連——で呼称）への侵犯なのである。伊藤敬氏は、『増鏡』の明暗循環の立場から、この四人の記事を「当時の協調安定・栄華の陰の世界、さらに強いて言えば龜山院以降の大覚寺統衰滅の予告を読者に与える」と説明されたが、『増鏡』と擬古物語との関係からも、同じ結論に達し得る。

最後に第三として、後宮（もと後宮も含む）の恋・情事は五分類をすると問題点が分かり易い。

●後宮と臣下の恋・情事（三件）

●後宮を臣下に下賜（二件）

●臣下の妻妾を後宮へ迎える（一件）

●女性を盗みだし後宮に迎える（二件）

●近親者の後宮を迎える（二件）

事件は、合計九つ（重複が一件）あるが、擬古物語を検索すると、極めて頻繁に登場するモチーフのもので、表現も相当に類似しているものがあることが確認できる。従来、『増鏡』の恋・情事の記事が取り上げられると、その不道德性・退廃性が取り沙汰されるのであるが、それは、先行の物語の中では、相当に目慣れたものであったのである。

なお、これら九件の当事者である帝・院というのは、龜山院・後宇多院・後醍醐天皇の三者に限定されているのである。この三名というのは、大覚寺統（私には「公武対立派」と呼称）のちよど三代（祖父——父——子）に相当しているという顕著な傾向がある。いかに皇妃の犯しが軽視された時代とは言え、『増鏡』のこれらの記事からは、大覚寺統の血脈の濁り、という印象を受けざるを得ないのである。

以上、『増鏡』中で描かれる禁忌を「兄妹の恋・情事」、「皇女との密通」、「後宮に絡んだスキャンダル」と三面から検討してみた。『増鏡』がこれまで論じられている通り、『源氏物語』の強い影響下にあることは間違いないのであるが、同時に、平安後期の物語、および鎌倉時代の擬古物語の世界の反映を無視することは出来ないものである。今回取り上げた、わずか三つのモチーフ以外の検討も、早急になされねばならない課題と言えよう。